

博士論文審査報告書

論文題目

神仏習合儀礼の場の研究
－ 神道灌頂を中心として－

A Study on the Syncretistic Ceremonial Site
－ Focusing on the “Shinto-Kanjo”

申請者

米澤	貴紀
Takanori	YONEZAWA

2013年7月

近世以前の日本における信仰形態である神仏習合は、寺社を取り巻く文化の形成に大きな影響を与えたことは広く知られ、多くの興味を引いている。しかし、明治初期の廃仏毀釈によりその大部分が失われたため、信仰と文化の実態を知るべく、史学・宗教学・民俗学などの分野を中心とした限られた研究が行われてきたに過ぎなかった。一方で建築史学一般は、建築物の意匠や形式の分類・分析や生産論からの研究が多くなされてきたが、神仏習合信仰が直接的に建築物の形態に及ぼした影響が少なかったため、この分野の研究は十分に行われて来なかった。また、1980年代頃から寺社での法会に着目し、建物の使われ方、人々の動きを伴った場として建築を理解する研究が行われてきたが、神仏習合儀礼の場についてはほとんど研究がなされてこなかった。このように、日本の宗教建築史を考える上でその文化的基盤であった神仏習合は重要であるにもかかわらず研究が遅れているテーマである。著者はこの反省の上に立って本研究を志したものである。

本論文は以上の背景にもとづき、神仏習合が生み出した儀礼、特に神道の秘儀・秘説を師弟間で相伝する重要な儀礼であった神道灌頂を中心に扱い、その分析を通して、儀礼の場の特質、場を作り出す志向性を示した意欲的な研究である。これまでは儀礼の次第と教学のみに関する研究が多かったが、本論文では神道灌頂が人の参加する儀礼であることを意識し、灌頂の受者が教説を理解し、その背景を感得するために作られた場、すなわち理念を現実世界に形として表現したものを分析・考察している。儀礼書にある灌頂道場やその設えの記述・図、神道灌頂の実修記録をもとに場の構成を分析する方法とあわせて建築史ならではの視点による独自の研究となっている。これは建築史学で数少ない神仏習合に関する論文であり、特に神道灌頂については初めて本格的に取り組まれたものとして高く評価できる。

本論文は序論、本論7章と補章2章、結論からなる。

序論では研究の背景、本論文の目的・方法が示され、加えて既往研究として関連分野を含めた神仏習合に関する研究と、建築史学における灌頂儀礼に関する研究を概観し、本論文の独自性と位置付けを明示している。また、本論文で言及される神道の建築を造るという視点から、近代の神社建築設計者について言及しているが、このことは本論文の扱うテーマが広く日本の宗教建築を考えていく上で重要であることを改めて確認したものだといえよう。

第一章では、神仏習合の歴史的展開、神道灌頂、神仏習合思想と寺社建築の関係についてまとめることで、本論を展開する基礎を確かなものとして明示している。

第二章では、神道灌頂の場の具体的な事例として三輪流神道の神道灌頂を挙げ、神道要素と仏教要素を分析、密教の灌頂と比較を行っている。そこから神道灌頂の場の特質が密教灌頂の構成を骨格とし、神道要素を象徴的に加えた構造であることを見出している。加えて密教灌頂が儀礼の権威をもたらしていることを示し、教義・儀礼の整備・発展が目指された時代背景によ

って生まれたものと論をまとめている。また神道灌頂の場は、個々の舗設の作り方は決まっているものの、全体の形と配置は実際の状況に応じて変形・工夫がなされていたことも明らかにしている。この分析と考察はこれまでの建築史学では見られないもので、独自のものとして評価できる。

第三章では、神道灌頂が行われた道場の規模と建物、寺社との関係を灌頂関連文書の丹念な読み込みから明らかにしている。神道灌頂道場の基本的な広さが三間四方であることを文書から明らかにし、この広さについて設え・荘厳に用いられるものの大きさと、人が動くために必要な広さを検討することで、これが灌頂に必要な最小限の広さであることを示している。また、方三間をもとにした理想型とも言うべき道場の姿があったが、実際に儀礼を修するにあたっては、会場となる建物に合わせるため壇の大きさを変え、別室に小壇を設けるなどの変形がなされ、調節が行われていたことも示している。加えて、神道灌頂道場は仏教・神道どちらの建物でも行われたことも確認している。以上の結論は、これまで建築史学では扱われたことのない史料を用いて得られた新たな知見といえる。そして文書に記述された寸法と実際に使われた設備の寸法の比較検討や、建物と舗設との関連の解読は、建築学ならではの方法であり専門性を活かしたものであると評価できる。

第四章では、室町時代に大成した吉田神道以降の神道諸流派について思想をまとめ、神仏の習合に対する儒学者や国学者による牽強附会であるとの批判と、仏教側がそれに対抗するの必要に迫られたことを確認しており、次章の分析・検討の導入としている。また、神仏習合以外の神道説のうち吉田神道と橘家神道の儀礼を具体例として分析し、それぞれの儀礼の構成を明らかにしたことは、これまで研究事例が少ないことから重要な成果である。また、神道儀礼をもとにして陰陽道や五行説を取り入れた習合と儀礼の場をつくることが可能になったことを論じ、これは神道が宗教体系として成熟してきた証拠であるとしたことは優れた見解として評価できる。

第五章では、密教にもとづく近世の習合神道である雲伝神道の儀礼の場を扱っている。雲伝神道は同じ神仏習合神道である三輪流神道の説を附会として批判し、神道に重きをおいた説を展開するなど、時代に則した考えを持っており、この近世的な習合神道が作り出した神道灌頂の場は、密教灌頂の骨格に神道要素を付け加えただけではなく、日本神話のみに依拠した設えを作り出していたことを明らかにしている。この背景として国学・儒学の興隆による神道への意識の強まりと、考証学の発達による教説・理論の正当性の評価の動きを挙げている。そして、この儀礼の場は受者が神話の内容を追体験することに重点がおかれ、これが近世的な儀礼の場の特徴であると結論している。建築史における近世の習合神道に関する研究は極めて希少であり、時代性を踏まえた空間の特質の指摘に到達した考察も大いに評価できる。

第六章では、前章までの内容を総合し、中世的な三輪流神道と近世的な雲伝神道の神道灌頂の場の比較を行い、志向性の違いを明らかにしている。中

世の灌頂の場は、師からの教えによって初めてその意味が理解できるようになる秘密性が儀礼の価値を生み出している一方で、近世では、名称と形からその場と設えの由来となった神話・説話を受者が自ずから理解し、神々の満ちた場所を体験することが重要であったと結論している。中世では知識は限られた人の間で伝えられるもので、その秘密性に価値があったのに対し、こうした知識が民衆にも広がった近世では、そこに記された世界や場面を直に追体験することに価値がおかれたことを示しており、場の志向性の変化とその背景を丹念に追った論証は優れたものである。

第七章では、灌頂儀礼の神道化の進展を論証している。密教僧により習合儀礼が作られた時代には、仏教儀礼の骨格に具体的な神道要素を象徴として纏わせることで儀礼の権威と表現を両立させたとし、その理由として、元来の神信仰が儀礼によって伝授する類の教えを持たず、普遍宗教である仏教は抽象化できる儀礼を持っていたためとしている。近世では神道が日本古来の教えであるという意識にもとづき、中世以来の習合説に見られた牽強附会の説を除き、神道神話に依拠した要素が加えられ、より神道神話との親和性、無謬性がはかられていた。ここには当時における、さらなる「日本」的要素の付加が内包されていることを指摘している。一方で、二章で示した灌頂の場の特質は変化していないことをも指摘し、神道灌頂が根本的な儀礼として定着していたと推論している。本章では儀礼の場を時代の流れから捉えることで、その変容過程と不変の本質を明示したことは重要な成果と言えよう。

以上の章に加えて補章を2章設け、神仏習合神道において鳥居に込められた理念と大工技術書のなかに記された鳥居付きの護摩壇について考察している。前者では神道を表す鳥居に仏教の抽象的な概念が投影され、仏教理論のもとで境内、儀礼の場の構成が決められていたことを明らかにし、後者では鳥居の作成に大工の知識が用いられていたこと、記された護摩壇が両部神道系の流派で用いられた可能性が高いことを明らかにしている。習合神道の場の設えについて本論とは別の視点からも論考を深めており、評価できる。

以上を要するに、本論文は、神仏習合思想のもとで作られ発展した神道灌頂の場について考察し、その特質を明らかにしたもので、結果として習合神道の儀礼の構造と、その志向性の変化の過程を明らかにすることに成功している。これは日本の宗教建築空間の変容の実態に、神仏習合という新たな視点から切り込み、評価を与えることに成功した、意義深く優れた研究であり、建築学の発展に大いに寄与するものである。

よって本論文は博士（工学）の学位に値するものと認める。

2013年6月

審査員	（主査）	早稲田大学教授	工学博士（早稲田大学）	中川武
		早稲田大学教授		石山修武
		早稲田大学教授	博士（工学）早稲田大学	中谷礼仁